

## 生き方 その二

今まさに僧侶の意識改革が叫ばれています。敢えて申し上げますが私の周辺の僧侶や（檀）信徒や近所の人とかを見ていても女々しい男たちが増えたものです。私の場合は明治・大正生まれの人たちを見て育ちましたので男気とか気概を好みます。ですからよくもこんな男たちに女性が付いたもんだなと思うことしばしばです。（たいした女性ではないものの、まことに失礼ながら。）私はもっと武士やカウボーイになれと言いたい。

私の妻に先日私と結婚した理由を尋ねたところ破天荒で型破りなところと答えてくれました。僧侶も中には女の腐ったようなものが案外といます。何かにつけてお節介焼きでやっかみの塊、斜に構えています。どうしてこうなってしまったのかと思います。僧侶というのはつるみっぱなしの人が多く一人では行動ができない人が多すぎます。なぜなのでしょう。それは寺院社会という閉ざされた塀の中にいること。世襲という枠の中で縛られていること。親族にも寺族が多いことが考えられます。そして僧堂（修行道場）は徹底した軍隊教育であり画一的な規範が求められます。これも一時的には問題はないのかもしれませんが度が過ぎているきらいもあり若くして完膚なきまでに叩き込まれるために一生それが染み付いてしまい融通の利かない人間になってしまいます。わたしも弟子達5、6人を僧堂に送りましたがほとんどはものにならず修行の成果などどこえやらと言わんばかりです。

僧堂生活による紋切り型の人間形成は個性や人間的魅力を喪失させます。わたしはそれを金太郎飴製造機関と言っております。僧堂改革は喫緊の課題です。こうした宗門機関からはベンチャーやスタートアップと言われる挑戦者は絶対的に出てきません。何故なら潰されてしまうからです。破壊者は追放の運命にあります。これからの僧侶は葬式仏教や檀家制度のなかでは生きていけません。

現在私は寺院業務として葬祭業、霊園事業、仏壇仏具の販売、僧侶紹介を手掛けております。すべては一貫しているため効率的な運営は出来ております。今後は貸会議室やセミナールーム、講演会場の貸与も検討しています。将来的には貸しオフィスや食堂、また法律関係の仕事ができればと考えております。寺院コミュニティー、見性院村を創設してレジデンス（住居群）を用意します。リタイアをした人達の第二の人生は宗教的生活をしてもらいたいと思います。そこでは修行ができて哲学が学べ雇用も創出します。精神的肉体的健康をモットーに生涯現役で暮らせる社会を創造します。まさに揺り籠から墓場までを用意します。すべてを宗教的枠組みの中で完結させます。

私がかつてドイツの大修道院で見た光景です。そこでは日常生活のすべてが整っていました。神父さんたちはあらゆる職業の人がいて商店街のように分担をしておりました。大工さん、パン屋さん、医師、看護師、料理人、教師、事務員、農業人、神父以外の仕事をして生計をなりたたせていました。そこは大修道院というまるで村でした。これからお寺もあらゆる分野、業態の人と連携してホールディングス化してゆくことも生き残っていく上で非常に面白いと思います。そもそも江戸期の寺院は寺子屋道場、役所、葬祭業を兼職して村の中核的な存在でした。住職は僧侶は村一番の知識人、人格者として人々の人望を一身に集めていました。

昔に戻してゆくこともありかと思えます。それこそが寺院再生のヒントかとも思えます。それには僧侶のエリート教育は必須です。宗門大学はすべて大学院大学にして寺院子弟は一般大学を目指させる。大学院大学に漏れた人は専修学院として専門学校を併設させることを提言します。そして僧堂は一年間でもほぼすべてのことが出来るくらいのカリキュラムに作り直すことです。そうすれば僧侶以外の資格を取得して生活力を身に着けることもできます。今はつぶしのきかない僧侶が巷に溢れかえっています。困ったものです。もっともっと勉強をして実力をつけないとはいけません。少なくとも（檀）信徒が太刀打ちできないくらい能力を身に着けて圧倒していくことです。

これからの寺院は宗派や檀信徒や行政を頼ってはいけません。というよりも頼りにはなりません。自助、公助、共助から自助、自立、自責の念を持ってと私は言いたい。孫子の兵法の中には「戦わずして勝つ」ということがあります。世の中そんなには甘くありません。総裁選も権力闘争と言われます。政治改革以上にたいへんな宗教改革は命がけでやらない限り成功はしません。私は僧侶にとってもっとも大事なことは常に宗教的生活をすることだと思えます。常に剃髪をして僧形でいること。身なりも心も整えていることです。ですから社会福祉法人ですと園長との兼任になります。身も心も切り替えないといけません。また寺院というのは佇まいや静寂さ、奥ゆかしさというものがいのちです。社会福祉法人の建造物と寺院建築はどことなく噛み合いません。墓地との相性もよくないと思えます。あくまでも寺院は宗教法人はどこまで行っても寺院であり宗教法人であります。そことの組み合わせは重要事項です。

私は食堂経営をする場合でも精進料理や蕎麦屋以外は考えておりません。私自身も食生活は普段からベジタリアンにかなり近いもので過ごしております。建築や庭園、料理の勉強のために定期的に京都や歴史的街並みには出かけております。京都の大本山や禅寺から学ぶことしきりです。

ただし今の既成仏教教団のシステムは崩壊しかかっているためそこは改革ができない大本山よりも地方寺院の方が先に動くべきというのがわたしの提案です。それによって大本山や中央本部を突き動かさということ。このままですとどこの宗派も優秀な若手僧侶は輩出されません。大事なことは宗派を超えた連携と各分野との業務提携が鍵になってくると思います。そのためには宗侶はより一層の弁道修行と時事問題への関心、宗教哲学への洞察は欠かせません。

以上僭越ながら自戒を込めて提言をさせていただきます。ご一読をいただきましたことに心より感謝を申し上げます。

合掌

令和3年9月27日

見性院 住職